



〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉

第85号 2014年3月31日

資料見聞 椿姫像

仏像ではない。かといって神像の様式ともちがう。そんな不思議な像がこの「椿姫像」です。

椿姫は、三原村の伝説のヒロインです。では椿姫はどんな女性だったかと問われれば、調べれば調べるだけその物語は謎めいてきます。

まず椿姫は二人いたようです。

時代も経歴も違う椿姫の物語が、三原村には二つも伝えられているのです。当然、葬られている場所も二ヶ所あります。



椿姫像 三原村皆尾 福万寺蔵

但馬守に見初められますが、既に姫は一条氏の妻になっていました（養女説もあり）。この三角関係がもとで敷地氏は滅亡することとなりますが、姫は敷地を離れ、現在の三原村へ逃げていきました。ところが、峠で父親の民部の城が落ちたことを知り、もはやこれまでと自害します。峠近くに今も祭られる御霊神社は、姫を祭ったものと言い伝えられ、三原村の狼内集落で祭っています。

一人目は、この像が祭られている皆尾という集落に葬られています。生まれたのは室町時代の15世紀後半、中村に下向してきた一条房家の落としたねという設定です。母親が椿の実を食べた夢を見て生まれたので椿姫と命名されました。ところが、お話しのお話も無く、若くして死んでしまします。

その姫を埋葬したのが皆尾なのです。もう一人は中村の町から北へ行った後川ぞいの農村・敷地で16世紀の初めに土地を治めていた敷地民部藤康の娘として生まれています。その美貌ゆえ、現在の黒潮町入野に拠点があった入野

う。 姫、いったいどちらが正しいのでしょうか。

調べてみると狼内の椿姫、つまり敷地民部の娘は古い文献では椿姫と呼ばれていないようです。どうやら椿姫の名前が有名になったので、敷地民部の娘の名前も椿姫になってしまったようです。

像はヒノキ材、寄木造、玉眼を嵌めています。こんだ彩色像で、両手を胸前で合掌していますが、当初の彩色を一部に見ることができます。

（濱田眞尚・梅野光興）

企画展

椿姫の里・三原

― 四国西南端の村の伝説と民俗 ―

平成26年4月26日(土)～6月15日(日)

梅野 光興

三原村は、高知県の西部・幡多郡にあつて、四万十市、土佐清水市、宿毛市、大月町と海に面した4つの市町に取り囲まれた山間の村です。四国の「村」

で最も西南端に位置します。三原村と言えば「硯」や「どぶろく」が有名ですが、幹線道路からはずれていることもあつて、なかなか行く機会の少ない所です。

そんな三原村を度々訪れるようにな

りました。それは、教育委員会の方からの「民具を整理してもらえないでしょうか」との一本のお電話がきっかけでした。

三原村には昭和50年代に集めた民具が約300点あり、そのままになっているので活用に向けて調査と整理を行なうこととした。

ただ、当館も自分の所の民具整理に追われている状況です。人手が無けれ



田の神オサバイ様を祭る (三原村下切 2012.5.13)
米どころ三原村には豊富な稲作儀礼が伝承されてきたが、今では消滅寸前である。



行なわれた
村政100周年を記念して
最後の猪舞 (1989.10.11)
写真提供：森敏弘氏

比較が必要です。また、どうせなら民具だけでなく、年中行事や祭礼芸能、文化財や古文書にも範囲を広げれば三原村の文化的特徴を示すことができるのではないかと思います。

三原村は、四万十川のような大河も

なく、四国山地のような厳しい山村でもありません。どちらかと言えば普通の農村です。ですが、その普通の農村にも、独自の自然環境や歴史があ

り、そこに文化的な個性が育まれているはず。私にとって未知の地域で調査するのは大変面白い経験でした。

結果としては私の力不足もあり、調査もまだ途上なのですが、教育委員会と文化財保護委員の方々をはじめ、地域の方の全面的な御協力を得て調査を行なう中で、興味深い事柄が次々とわかってきました。

2年経ち、民具整理が一段落する頃、その成果を歴民で展示してはどうか？と考えつきました。ただ、三原の民具を見ていただけでは、三原の特徴はわかりません。高知県全域や周辺部との

ひとつ目は、今回タイトルに使わせてもらった「椿姫」に代表される伝説の豊かさです。村内には他にも椿姫が飼っていた猫を祭る猫神様や、姥を祭るうばたきごんげん 壱瀧権現などがある上、かつて行な



炭焼きは貴重な現金収入源だった。
(三原村広野 2012.6.25)

わかれていた猪舞ししまいも椿姫や敷地一族に関わる行事でした。1頁でも述べたように、椿姫伝説には二つの流れがあり、その二つがからみあいながら成長していったようです。高さ15〜20mの柱の上で芸をするユニークな猪舞はもう25年間行なわれていませんが、現存していたら間違いなく幡多を代表する祭りのひとつになったことでしょう。今回はおそらく初めて村を出る椿姫像をはじめ、平成元年に行なわれた最後の猪舞の衣裳や写真、そして三原の小学生たちが作った模型を展示し、伝説の謎に迫ります。

ふたつ目には、民具にも幡多の特徴と言えるものが見えてきました。田をすく犁すきは、県中東部ではウシグワと呼



ドッサリ



飯ホゴ
(中東部では飯フゴ)

ばれますが、三原など西部ではスキと言います。同様に田を掻くウマガワをカナコ、藁で編んだ袋であるフゴはホゴなど同じ高知県でも名称に違いがあります。そのスキで耕せなかった隅っこを人力で耕すための大型の鍬がドッサリです。この鍬は三原で発明された『三原村史』に述べられています。中東部では聞かない鍬です。三原村の民具調査がきっかけで、県内の地域差に気づかれています。展示では、どぶろくの里のかつての米作りを示す農具、そして山林を利用

した林業や炭焼きの資料を紹介します。第三に、三原村の民俗芸能に注目です。三原村の秋祭りには太刀踊りやうちわ踊りが奉納されます。幡多地方の太刀踊りは、普通の刀より柄の長い太刀を持つての踊りですが、県中部のものとはまた異なる迫力があります。うちわ踊り（こおどり）は黒潮町から四十市、土佐清水市にかけて見られるものの、宿毛市や大月町では希薄です。どうやらうちわ踊りは東から広がってきたようです。一方、夏の三原祭りで踊られている伊予踊りは、名前の通り、愛媛県から伝わってきたようです。このように、三原村には東西の文化が流れ込んで来たようです。それは、橋尾先生が実施している全集



柚ノ木の太刀踊り (2011.10.23)

落言語調査によっても解明されていくことでしょう。5月3日には柚ノ木地区の踊り子の皆さんに勇壮な太刀踊りを公演して頂きますのでお楽しみに。最後に、副館長の濱田による寺社文化財調査を掲げておきましょう。史料がほとんど無いため、三原の中世はよくわかっていないのですが、今回の調査で中世の仏像が確認され（5頁参照）、敷地一族の墓など立派な五輪石群の存在もあわせて、文字には残っていない中世の三原村の文化を想像させてくれます。これらのいくつかの手がかりをつなぎ合わせていくことで、三原村の豊かな文化が浮かび上がってくるのではないのでしょうか。



皆尾のうちわ踊り (2012.10.14)

三原村の民具と言語調査の歩み

高知県立大学文化学部教授

橋尾直和

三原村では、文化財保護委員会が「なくなってしまううちに集めておこう」と、明治から昭和までに使用されていた機織りや糸車、石臼、食器などの民具約300点を中央公民館で収集・保存してきました。2009年にこれらの文化価値を高めるとともに観光資源として活用しようと、高知女子大学（現高知県立大学）文化学部が調査、データベース作成、整理、保存の依頼があり、筆者と文化学部の学生が、歴史民俗資料館の学芸員の梅野光興さんと中村淳子さんのご協力を得て、地元の方々に民具の使用目的・名称や当時の状況などを聞き取り、台帳作成や写真撮影などのフィールドワークを開始しました。

2009年7月、高知女子大学（現高知県立大学）文化学部と三原村は連携事業の協定を結びました。（2010年12月には県立歴史民俗資料館も加わりました）。単なる整理だけでなく、柚ノ木の太刀踊りを見学したり、下切地区のグループ「老止（おとめ）クラブ」のご年配の方々の指導で、日よけに使う「ヒニノ（日蓑）」や蓑製の「ホゴ（ふご）」作りも体験しました。学生たちは、

「実際に民具を手にとることができて、昔の暮らしを想像することができました」「実際に作ってみて、暮らしについて学ぶことができました」と感想を述べていました。三原村農業構造改善センターで開催された、村あげてのカラオケ大会に招かれたことも、三原村の皆さんと触れあう機会となり、良き思い出となりました。

さらに、次のステップとして、2013年9月21日（土）から23日（月）までの3日間、高知県立大学の学生が中心になって行うプロジェクト「立志社中」による、「三原村民俗・言語調査プロジェクト」を実施しました。



民具調査風景



言語調査チームと村の文化財保護委員、調査に協力して下さった方々

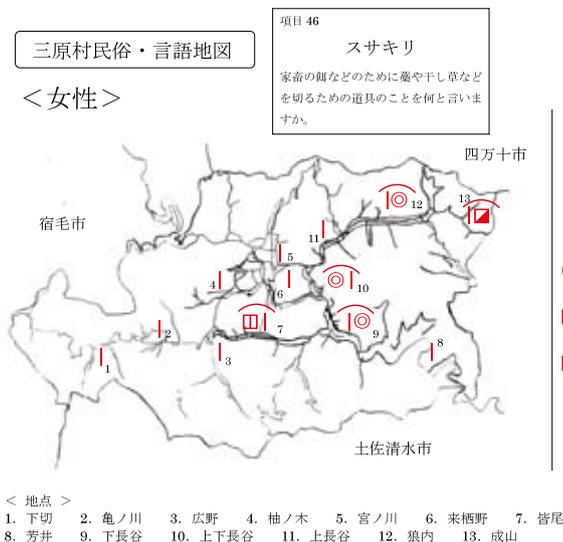
チーム名は、from ZERO（フロムゼロ）で、計6名の学生が三原村全集落13地点を、3つのグループに分かれて、それぞれ文化財保護委員の方々にサポートしていただきながら「民具の方言呼称」について調査しました。この調査結果に基づいて、「モノとコトとヒト」の移動が分かる言語地図を作製し、2014年度に開催される、企画展「椿姫の里・三原」のパネル展示に活用する予定です。

この民具調査が、「カンカンミンガク（館・官・民・学）」の協

働による、地域と博物館、大学が連携して貢献できるモデルケースになれば、幸いです。

最後に「三原村民俗・言語地図」（作製した18項目39点中1項目1点）を掲載します。

調査項目の例を挙げると、ゾーリ（衣）、キネ（食）、イロリ（住）、ジョレン（農）、ウエ（漁）、ハメキリ（畜）、オイコ（運搬）、イー（社会）などです。ここでは、スサキリ（女性）の例を掲げておきます。なお、図中の（）の下における左の記号は優勢形、右の記号は併用形を表します。



三原村の祈りを訪ねて

― 寺社文化財を中心とした地域文化財調査の試み ―

濱田眞尚

高知県の集落の成立や各地域の姿を歴史的にひもとく基礎資料として、「長宗我部地帳帳」「土佐州郡志」「南路志」などがあります。各時代の村落の様子が記録されていて、研究者の基礎文献としてもしばしば引用されます。

「南路志」を見てみると、三原村内の集落の基礎的な姿が江戸時代中期にはすでに存在していることを読み取ることができ、明治時代に入りこれらが旧村単位で行政区画化されてい

きます。この「南路志」には、各村落

ごとの寺堂や神社名や小さな祠と考えられるものまで記録されています。しかしながら、これらの地域信仰に関する記述の全てが今日に至るまで残存しているわけではありません。理由として、ひとつに、明治政府の施策として

「神仏分離令」が発せられ、いわゆる「廃仏毀釈」という現象に至ったこと、さらに、太平洋戦争後の近代化に伴う社会構造の変化があったことなど、地

域の祈りの姿がまさに激動の時代の中で、うすれていかざるを得なかったのかもしれない。

こうした中であって、往時の人々の息づきを今は見ることができなくとも、寺堂跡や神社に、三原村内の各集落にその残存した歴史を垣間見ることができはしないか。この「三原」地域を紹介する企画展の中で、再発見できないか。その調査成果の一部をご披露できればと考えています。

今回、村内のほとんどの集落を回り、現存する神社や寺堂の多くを調査することができました。

文化財調査として、彫刻（仏像）・美術工芸品（絵馬・銅鏡など）・歴史



阿弥陀如来立像（皆尾福万寺蔵・室町時代）

資料（棟札・版木など）・考古資料（石造物）等を対象として行ない、その残存状況の全容把握がおおむねなされたことは大きな成果です。とりわけ、鎌倉時代・室町時代の作と考えられる仏像が三集落（上長谷・皆尾・柚ノ木）で確認



素朴な神像（亀ノ川水室神社蔵）

されたことや、これまで県下の調査例の少ない極めて地域性の強い神像群が各所で見出されたことなどが挙げられます。

これまでに文化財として村教委発行のマップで紹介された以外の資料の確認や、既存資料の現状把握に加えて、祈りの姿の地域特性の一端をとらえることができたと考えています。こうした文化遺産は、指定文化財のような華やかさはありませんが、それぞれの地域ごとの歴史の証しとして大切に記録・伝存すべきものですし、「地域史」保護の重要性を再認識する良い機会となれば幸いです。

考古

佐川町・山中の墓標



佐川町乙 山中の墓標

平成25年(2013) 11月23日、依頼のあった某家近世墓標の調査のため高岡郡佐川町に館職員西田由紀と共に出かけました。ご自宅に伺い、佐川町の近世墓標を見学させていただきました。その後、佐川町乙の山中の林道に車を進めました。調査に行く前に、竹の立派な杖を頂きました。この杖は、杖と兼用のイノシシよけでした。確かに山中深く足を踏み入れると、谷沿いにえさを探していたのか、イノシシが掘り起こした痕跡がありました。谷を渡り、急斜面を登ると墓地がありました。かつては集落があった地域です。10基ほどの墓標が残っていました。18世紀ころから出現してくる所謂駒形の墓標と方柱形の笠付き墓標、台座の上に地蔵をのせた墓標がありました。その他に、珍しい家屋型のものでありました。石室(石殿・石祠)と呼ばれるもので、扉がありません。石室は崩れ、何かを納めていたと思われるのですが、残っていませんでした。かつては、木を切り出す時に転用したとか。忘れられない調査と墓標でした。(岡本)

歴史

江戸時代の「介護」



「土佐国鏡草」

最近、個人の方からお預かりした資料群の中に、興味深い冊子がありました。「土佐国鏡草」と題された写本です。江戸時代、孝行・忠義・貞節・和睦など善い行ないをした者には、藩から褒美として米や銀が下されることがありました。この本は、褒賞された善行人の事績22例を物語風にまとめて紹介したものです。褒賞理由として圧倒的に多いのは、父母や舅姑への「孝行」。高知城下に住む貞助の妻の姑への孝行の事例を見てみましょう。

冬は暖かく夏は涼しく、朝から夜まで快適に過ごせるように気遣う。食べ物の甘さ・辛さ・煮加減にも気を配り、珍しい品があると聞けば分けてもらいに行く。姑の髪を洗い、櫛を入れて清潔に整え、体の痛み・痒みをさすったりかいたりする。寒い夜には何度も起き出して冷たい手足を懐に入れて暖め、排泄物で汚れた着物や布団は夜の間に洗って誰の目にも触れないよう配慮する……「物語」としての多少の脚色はあるでしょうが、何ページにもわたる「孝行」の描写に驚かされます。

美が下されたという事実。それは、一見素晴らしいことのようにですが、暗に「家族」に介護の全てを要求する厳しいもの。人間に「老い」がある限り、介護をめぐる問題はいつの時代も尽きないということなのでしょう。(大黒)

民俗

坂東眞砂子さん



香美市物部町で調査中の坂東さん。いざなぎ流を題材にした小説も幻になってしまいました。

土佐の民俗や歴史を題材にした小説を数多く執筆してこられた坂東眞砂子さんが、1月27日に亡くなられました。私が坂東さんを知ったのは、幕末の山村に起きた集団憑依事件を記した「豊永郷奇怪略記」を題材にした小説の準備をされている時でした。坂東さんは記録を想像力で豊かにふくらませ『鬼神の狂乱』という見事なエンターテインメント小説に作りかえました。特にクライマックスの畳みかけるような盛り上がりにはわくわくしました。出版に際して坂東さんと吉澤文治郎さんとの鼎談に参加させて頂いたこともあり、坂東さんを囲む飲み会にご一緒させて頂く機会がありました。民俗や歴史の話が飛び出すそれは楽しいひと時でした。まだまだいつでもこんな話ができると思っていたのに、本当に残念です。でも土佐の民俗を扱ったたくさんの作品が遺されています。小説を読みながらあちらへ逝った坂東さんと会話を続けたいな、とひそかに思っています。(梅野)

歴史にポニーが来たよ

このほど歴史民俗資料館では、企画展「おもちゃの牧場」に合わせて、動物ふれあい体験を行ないました。今年の干支が「馬」ということで、ポニーとミニホースに3日間来てもらいました。

小学校低学年の子どもはポニーに乗る事ができ親子で写真を撮ったりと園児から大人まで多くの方にふれあいを楽しんでいたことができました。
(濱田愛)



おもちゃの牧場

地元の小学生が

展示解説に挑戦!

岡豊山の麓にある岡豊小学校の3・6年生が、「総合的な学習の時間」で、長宗我部元親の歴史学習に取り組みました。本を読むだけの学習ではなく、当館の学芸員や長宗我部フェスの実行委員、さらに長宗我部氏歴代の墓を掃除している地域の人々に聞き取りをするなど多角的な学習活動を展開しました。6年生の学習成果はグループごとにまとめられ、当館の多目的ホールなどで展示(掲示)された他、お客さん相手の展示解説も行なわれました。
(野本)



京都で

「いざなぎ流と近世陰陽道」シンポジウム開催



陰陽道ツアーは齋藤英喜先生のガイドという贅沢な企画

12月7日に、京都市の佛教大学で、歴史文化講座「いざなぎ流と近世陰陽道」と題したシンポジウムが開催されました。これは、いざなぎ流と物部川流域の文化を考える会の「いざなぎ流の里・物部」を受けて企画されたもので、近世陰陽道研究の第一人者である林淳先生と梅田千尋先生が、宗教学や歴史学の見地から講演、梅野の司会で小松和彦先生と意見交換を行いました。短い時間ながら刺激的なシンポになりました。翌日は陰陽道ツアー。晴明神社をはじめ京都の陰陽道関連史跡を巡りました。
(梅野)

岡山県博で

「土佐の水とくらし」開催

1月1日から2月16日まで岡山・高知文化交流事業展「土佐の水とくらし」四万十川の漁を中心に「が岡山県立博物館で開催されました。同館の信江学芸員は「水とくらし」というユニークな切り口で、四万十川の祭祀遺構出土品や漁具、絵金や和紙、鱈や郷土玩具といったバラエティー豊かな土佐の資料を展示し、多くの方々にご覧いただきました。

同展にあわせて岡山県博のボランティアのみなさんと当館のカルチャーサポーターと一緒に展示ガイドを行ない、交流会で互いの活動に刺激を受けるなど、2年目も盛り多い交流事業となりました。
(中村)



過去10年間、写した四国に自生する
山野草の写真を公開します。



3月15日(土)～4月13日(日)

同時開催1階フリースペース
藤田茂男「吉延に魅せられて」「桜博達」

岡豊山さくら祭り・食1グランプリ

4月5日(土)・6日(日) 開催!

第9回 岡豊山フォトコンテスト

4月15日(火)まであなたの写真を募集中!
全作品展示 5月3日(土・祝)～6月30日(月)

第五回 長宗我部フェス

5月17日(土) 10:00～16:30

戦国市場・長宗我部ウルトラクイズ
戦国キャラ・ご当地キャラ大集合・グルメ etc.

いざなぎ流シンポジウム in 物部

「神々と精霊の物語 -いざなぎ流祭文の世界-」

5月24日(土) 13:00～17:30

場所：奥物部ふれあいプラザ

25日(日)には御幣切り体験・史跡めぐりも行ないます。

岡豊風日(おこほうじつ) 第85号
平成26年3月31日
編集・発行 (公財)高知県文化財団
高知県立歴史民俗資料館
〒783-0044 南国市岡豊町八幡1099-1
TEL 088(862)2211
FAX 088(862)2110
開館時間 午前9時～午後5時
休館日 年末年始12月27日～1月1日
臨時休館あり
観覧料 通常期(常設展)大人(18才以上) 460円・団体(20人以上)360円
(特別展・企画展常設展示込)510円
団体(20人以上)410円
無料…高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・障害者手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)
印刷・川北印刷株式会社

http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~rekimin/
Eメール: rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp

平成26年 4月～6月の催し

企画展 つばき ひめ 椿姫の里・三原

—四国西南端の村の伝説と民俗—

2014年 4月26日(土)～6月15日(日)

幡多郡三原村の民俗文化を、県立大学と合同で行なった民具調査をはじめ、言語や年中行事、文化財調査の成果をもとに紹介します。悲劇の椿姫伝説をはじめ、幻の猪舞、寺社の神仏、民具などを展示します。

特別講座 ●要予約・観覧料要

4月29日(火・祝) 13:00～16:00

「調べて残そう!地域の宝

—三原村の民具・祭り・言葉—

講師:橋尾直和氏(高知県立大学文化学部教授)
濱田眞尚(当館副館長)
梅野光興(当館学芸専門員)

れきみん講座 ●要予約・観覧料要

5月10日(土) 14:00～15:30「椿姫伝説の謎を探る」講師:梅野光興

史跡めぐり ●要申込・参加費要(講師:担当学芸員)

5月11日(日)「椿姫の里めぐり」

展示室トーク ●申込不要・観覧料要(講師:担当学芸員)

4月26日(土) 14:00～15:00



椿姫像(三原村皆尾福万寺蔵)

今年の 歴民の日 は三原村を満喫!

5月3日(土・祝) 観覧料は無料です

- 歴民クイズの陣
- どぶろくなど三原の物産販売 10:00～16:00
- 袖ノ木の太刀踊り公演 11:00～、14:30～
- 土佐民話の家[®] 三原の民話 13:00～14:00

特別予告

四国霊場開創1200年記念
4県連携事業

県立美術館
で開催!

空海の足音
四国へんろ展

会期:2014年8月23日(土)～9月23日(火・祝)

会場:高知県立美術館(高知市高須353-2)

主催:高知県、(公財)高知県文化財団

空海が四国霊場を開創したとされる弘仁6年(815)から1200年を迎える今年、四国4県ではそれぞれ遍路文化を紹介する展覧会を開催。高知県では県立美術館を会場として、県内札所の宝物を中心に国宝・重要文化財を含む約130点の作品を一挙公開します。